女人和歌大系

勅撰集・私家集・歌合

長澤美津編

女人和歌大系

第二巻

風間書房

昭和40年8月20日　初版発行
昭和53年10月31日　再版発行

女人和歌大系　第二巻
定価　七、五〇〇円

編者　長澤美津
発行者　風間歳次郎
印刷者　中内弘光

発行所
株式会社　風間書房
東京都千代田区神田神保町一の三四
振替東京一八五三番
電話(二九一)五七二九番

(暁印刷・有朋製本)

緒　言

本著は古代からの女性が、和歌の上で個人記録として残した筆書のものを集めて一書にまとめることを目的とした。古代といっても上代には対象となるものはなく、おのずから私家集、其の他日記、随筆、歌合など平安期及びそれ以後、即ち勅撰集期の期間のものとなった。

筆書の時代であるから、自撰、他撰に、かかわらず残存する伝本も、書写をかさねているので、原作のままに伝えるというのは困難である。またその伝本の在り方、研究の方法も一様ではなく、基準を定めるのにも不可能であることを考えさせられた。一応、現在流布しているものによることにして、特に研究されているものは、それを参照した。

さきにまとめた第一巻と同時に殆ど原稿を整えたのであったが、不備の点を補ったり、あちこち改めたりしているうちに二年がたってしまった。これ以上に新資料、其の他考証を重ねるならば限度がないとも考えられた。そのうち小屋を新築することとなり、長年の身辺のものを整理して、身軽になつて昨夏新居に移ったが、この原稿に関するものはそのまま携えて、手を加えつつ半年が過ぎた。余りに延引することを思い第二巻として仕上げることにした。

第一巻には公的な記録や、勅撰集の女性歌を中心に私撰集中の歌を集録し、第二巻には私的な女性家集を中心に日記、随筆、歌合等にわたり集録した。一、二巻を合せて勅撰集期までの女性歌の全貌を収集したことになった。続く第三巻には、これ以後江戸期の終りまでの私家集と、一、二、三巻を通じての年表を収める予定である。

この巻についても恩師久松潜一先生の御指導をいただいた。長い年代と広範囲にわたるこの編纂は、先生のお見守りがあ

ってはじめてなし得たものである。

資料については各方面の御厚意に預ったことを忝く存じている。殊に宮内庁書陵部の特別のおはからいによったこと、日本大学図書館、尊経閣文庫の貴重な蔵書の使用許可をいただいたことを特記しなければならない。底本とした諸本については、御関係の諸先生方に御配慮、御好意をいただいたことを有難く御礼申上げる。

書写、整理、校正、索引作成など長期にわたって協力された、戸川早苗、林喜美子、樋口美世の諸氏に深い感謝をおぼえる。

引きつづき骨の折れる刊行にあたって下さった風間書房に御礼を申上げる。

昭和四十年七月

長沢美津

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

一、本書には女人和歌大系第一巻についで、第二巻として勅撰集期の私家集・日記・随筆・歌合の作品を収録した。
一、私家集は全部、成るべく原型に近いものを収めた。日記・随筆よりは歌を抄出した。
一、歌合は主要な歌合を撰択し、女性の詠出者の歌を抄出した。
一、排列の順序は、大体作者の作品が勅撰集に初出した順とした。勅撰集に作品のない作者はあとにした。歌合については年代順とした。
一、各家集のはじめに、集の歌数・作者の略伝・作者の歌風を簡単に記した。
一、読み易くするために、仮名を漢字に直したところがある。異本の書きいれは、作品の理解に必要と思われるものにとどめた。
一、見出しの集名は慣用にしたがった。異名のあるものは見出しの集名の下に示した。
一、収録歌の初句索引を付した。
一、略符号は第一巻と同じ。
一、略符号

古今集――「古」　後撰集――「撰」　拾遺集――「拾」　後拾遺集――「後拾」　金葉集――「金」　詞花集――「詞」　千載集――「千」　新古今集――「新古」　新勅撰集――「新勅」　続後撰集――「続後」　続古今集――「続古」　続拾遺集――「続拾」

新後撰集――「新ゴ撰」　玉葉集――「玉」　続千載集――「続千」　続後拾遺集――「続ゴ拾」　風雅集――「風」　新千載集――「新千」　新拾遺集――「新拾」　新後拾遺集――「新ゴ拾」　新続古今集――「新続古」　新葉集――「新葉」　私家集――「私カ」　私撰集――「私セ」　続詞花集――「続詞」　古今和歌六帖――六　夫木和歌集――夫　万代和歌集――代　月詣和歌集――月　栄華物語――栄　大鏡――大　平家物語――平　今鏡――今　増鏡――増

異説のあるものには△　再出・重出には□　初句のみ記したときは→を付した。

作者別
時代別

女人和歌大系　第二巻

目次

緒言
凡例……一
第一篇　勅撰集期　私家集……一
1、伊勢集……三
2、小町集……三六
3、中務集……四四
4、本院侍従集……五九
5、檜垣嫗集……六三
6、蜻蛉日記の歌……六七
傳大納言母上集……七四
道綱母集……七六
7、赤染衛門集……八三
8、斎宮女御集……一一〇

9、馬内侍集……一二八
10、発心和歌集・大斎院前御集・大斎院御集……一四〇
発心和歌集……一四一
大斎院前御集……一四五
大斎院御集……一六七
11、小大君集……一七七
12、小馬命婦集……一八八
13、和泉式部集・和泉式部続集・和泉式部日記……一九三
和泉式部集……一九四
和泉式部続集……二三六
和泉式部日記の歌……二六七
14、紫式部集・紫式部日記……二七一
紫式部集……二七七
紫式部日記歌の歌……二八一
15、伊勢大輔集……二八三
16、弁乳母集……二九三
17、出羽弁集……三〇一
18、大弐三位集……三〇八

19、相模集（玉藻集）・相模集・思女集……三三
玉藻集……三三
相模集……三三七
思女集……三三九
20、経信卿母集……三四一
21、康資王母集（伯母集）……三四五
22、周防内侍集……三五五
23、紀伊集（祐子内親王家紀伊集・一宮紀伊集）……三六三
24、清少納言集・枕草子……三六九
清少納言集……三七〇
枕草子の歌抄出……三七三
25、下野集（四条宮下野集）……三七五
26、肥後集（京極家関白肥後集）……三九四
27、摂津集（前斎院摂津集）……四〇六
28、安芸集（都芳門院安芸集）……四一〇
29、堀川集（待賢門院堀川集）……四一五
30、二条太皇太后宮大弐集……四二三

31、式子内親王集（萱斎院御集）……四三四
32、成尋阿闍梨母集（成尋阿闍梨母日記）……四四五
33、小侍従集（大宮小侍従集）……四五一
34、殷富門院大輔集……四五九
35、二条院讃岐集……四六六
36、六条院宣旨集……四七二
37、俊成卿女集……四七九
38、更級日記の歌……五一四
39、重之女集……五一八
40、御形宣旨集……五二三
41、建礼門院右京太夫集……五二六
42、讃岐典侍日記の歌……五五三
43、弁内侍日記の歌……五五五
弁内侍の歌……五五六
少将内侍の歌……五六三
44、中務内侍日記の歌……五六七
45、秋夢集……五七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

46、十六夜日記の歌……五七五
47、賀茂保憲女集……五八一
48、主殿集……五九四
49、実材母集……六〇四
50、平親清四女集……六三五
51、平親清五女集……六四四
52、嘉喜門院御集……六六〇
53、徽安門院一条集……六六七

第二篇　歌合……六七一

1、亭子院歌合　延喜十三年三月十三日（九一三）…六七三
2、京極御息所（褒子）歌合　延喜二十一年五月（九二一）…六七五
3、内裏菊合　天暦七年十月二十八日（九五三）…六八〇
4、坊城右大臣家（師輔）歌合　天暦十年八月十一日（九五六）…六八一
5、天徳四年内裏歌合　天徳四年三月三十日（九六〇）…六八三
6、庚申の夜内裏歌合　応和二年五月四日（九六二）…六八六
7、女四の宮歌合（規子内親王前栽歌合）　天祿三年八月二十八日（九七二）…六八八

8、蔵人頭家（実資）歌合　永延二年七月七日（九八八）…六九三
9、上東門院菊合　長元五年十月十八日（一〇三二）…六九四
10、賀陽院水閣歌合　長元八年五月十六日（一〇三五）…六九七
11、弘徽殿女御（生子）歌合　長久二年二月十二日（一〇四一）…七〇〇
12、麗景殿女御（延子）絵合　永承五年四月二十六日（一〇五〇）…七〇三
13、祐子内親王家歌合　永承五年六月五日（一〇五〇）…七〇六
14、後冷泉院根合　永承六年五月五日（一〇五一）…七〇九
15、六条斎院（禖子）物語歌合　天喜三年五月三日（一〇五五）…七一〇
16、皇后宮歌合（皇后宮寛子春秋歌合）　天喜四年四月三十日（一〇五六）…七一三
17、郁芳門院媞子内親王根合　寛治七年五月五日（一〇九三）…七一六
18、高陽院七番歌合（前太政大臣家歌合）　寛治八年八月十九日（一〇九四）…七一八
19、左近衛権中将俊忠朝臣家歌合　長治元年五月（一一〇四）…七二四
20、内大臣家（忠通）歌合（内大臣家両判歌合）　元永元年十月二日（一一一八）…七二六
21、内大臣家（忠通）歌合

元永　二　年七月十三日（一一一九）…七三八
22、広田社歌合
承安　二　年十二月十七日（一一七二）…七三〇
23、千五百番歌合
建仁元年（土御門院御宇）（一二〇一）…七三四
（付）永福門院歌合の歌……七七四
十五夜歌合・歌合当座……七七四
五種歌合……七七五
仙洞五十番歌合……七七五
永福門院歌合……七七六
百番御自家合……七七七

索引

掲載歌初句索引……七九一

第一篇　勅撰集期　私家集（日記・随筆の歌抄出）

伊勢集（いせしゅう）

一、伊勢集　伊勢の家集

歌数　群書類従本　五一八首　長歌三首

歌仙家集本　五一三首　〃　二首

西本願寺本系統　四八三首　〃　一首

ある程度自選したものが女である中務の身辺に存在したのであろう。

二、伊勢（▲八七五―九三八）　元慶・天慶ころの女歌人

大和守藤原継蔭女、入内前の宇多天皇中宮温子のもとに出仕、温子の兄藤原仲平と恋愛し破局に逢い一時身を退いたが、温子の命で再出仕。寛平八・九年ころ宇多天皇の皇子を生んだ。（五・六歳にて皇子は夭折）昌泰二年に宇多院は出家され温子中宮は東七条の宮に移られ延喜五年落飾。伊勢は宇多天皇譲位後も七条后のもとに出仕した。後年宇多天皇第四皇子敦慶親王の愛人となり温子崩後に中務を生む。（敦慶親王は後撰集の歌人、正妃は宇多天皇第一皇女均子内親王）延長八年四十四歳で敦慶親王薨　翌承平元年六十五歳にて宇多院も崩御されている。晩年のことは明らかでなく、承平七年陽成帝七十賀屏風歌が年代をとどめる最後のものとなつている。

三、歌　風

古今集の女歌人として小町とつねに並び称せられている。歌風は小町と全く対蹠的で智的であり達者である。宮廷女房として公の場を占め幅広く活躍したあとをのこしている。古今集の撰者達と時代を同じくし、特に貫之の影響をうけたようであるが自己の才能を縦横に発揮し亭子院の歌合にも出場した。亭子院歌合仮名日記は、彼女がひそかに記したものといわれている。仮名文による最初の歌合記録として貴重なものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com